

ハルカ。

立木吉花



目次

空の果て。

鍵。

料理。

日向に潤む。

眠りの自傷。

アシカセ。

潜水。

優しさの物語。

奥付。

.....

はじめまして。

立木吉花(タチキヨシカ)と申します。

普段は絵描きをしていますが、時々詩も書きます。

今回は以前ブログ等で公開した詩作品を、

いくつかまとめてみました。

詩の内容はどちらかというとファンタジーです。

その中に自分の感情の一部を混ぜている感じです。

イラストは表紙だけです。

とりあえずお試し作品として制作したので、

描き下ろしじゃありません。

次回からはきちんと描き下ろしたいと考えています。

吉花名義での詩集は初なので、

なるべくライトなものを選びました。
興味を持って頂けたら幸いです。

空の果て。

時々思う事がある

空に抱かれて消えてしまえるなら
どれほど心穏やかになれる事かと

空はいつでも私を見ている
彼はいつでも私を受け止めてくれている

一人だけれど
一人じゃないと
慰めてくれる

いつも いつも いつも

空の果てが
誰かの心の端に繋がっていたなら
私は嬉しく思う。

鍵。

それは閉じ込める為の物ではなくて
解き放つ為の光

恐れずに掴んだなら
世界は
貴方は
強くなれるはずだから

それは目を逸らす為の物ではなくて
見つめる為の光

料理。

感情っていうのは
調味料みたいなもので
多過ぎても
少な過ぎてもいけない

「優しさ」が多過ぎる料理は
締まりが無くなるし

「悲しさ」が多過ぎる料理は
苦くて不味くなる

色々な感情が混ざり合って
初めて料理＝感情として成り立つ

だからだろう

自分は真面な味付けの料理を
完成させた事が無い

何時も何かしらの感情が
余分に含まれてしまう

自分に対してさえ
きちんとした料理が作れないんだから
誰かの為になんて
一生かかっても作れないような気がする

日向に潤む。

聞き覚えのある聲が
新緑の間から響く

私は白い日傘をさして
陽が傾くのを待っているの

二人だけで
結婚式の真似事をした時計台
そこに私は立ち尽くして
何を待っているのかしら

百円で買ったおもちゃの指輪
お互いに交換しあった幸福な時間
それももう
どこかに消えてしまった

幸せも
過ぎてしまえば
単なる記憶になるだけで
痛みも嬉しさも何もないのね

私は白い日傘をさして
貴方が来るのを待っているの

聞き覚えのある聲が
蝉の間から聞こえた気がした

陽はまだまだ傾かない

眠りの自傷。

遠い昔の自傷跡
今はどこにも見つからない
記憶を手放したから
痛覚も同時に失くしたから
きっと叩かれても
痛くないのね

どこかに消えた記憶に
ごめんと呟いても
届かないよね

今の
私の心は
白紙でしかなくて
色が落ちても
透けてしまうのよ

ただ漠然と生きているだけ

もしかしたら
必死に抗っていた過去の頃が
一番まともだったかも

過ぎてしまうと
忘れてしまうから

ごめんと呟いて
眠ったまま
過去に生きていたい

アシカセ。

ハコの中で日々が眠る
誰かの疼きを抱きしめながら

見えないはずのココロは泡沫
血涙溢れた四肢は粉々

ドコに貴方の「光」はあるの？

悪夢を小瓶に詰め込んで
ミライの不幸を探しに行こう

嘘吐きな時計は耳の奥で
「アイシテル」を繰り返すだけ

ココに私の「影」はないのに。

潜水。

重たい海底は底無しの宇宙。
落ちる程に苦しくなって
意識は星屑。
飛び出て膨れて
無数に散らばる。
それが綺麗に見えるなら
貴方の眼はガラクタね。

短命な人の道行きは
滑稽過ぎて笑える。
生きる事に意味はないと
握り締めて潰れた花が教えてくれた。
両眼に映る海に
飛沫上げ、花と落ちて。

重たい海底は無限の宇宙。
落ちる程に自由になって
孤独は星屑。
ぶつかり碎けて
無数に生まれる。
それが規則に見えるなら
貴方の眼は贗作ね。

どんなに抗ったとしても
何時か必ず訪れる瞬間がある。
瞬きする刹那より
短くて長い「空間」。
どうすればいいかなんて
個々に落ちるまで
分からない。
だから、自らの星を壊すの。

重たい海底は寂滅の空。
落ちる程に温かさを知って
繋がる寂しさ

引き寄せ抱きつき

無数に重なる。

それが愛情に見えるなら

貴方の眼は真面かもね。

優しさの物語。

誰も知らない物語の終わりは
砕け散った鏡の向こう

ひとりごとはいつしか歌に変わり
隣でうずくまる君を
癒してあげる子守唄

「さびしさ」を見せ合って
いびつさを確かめ合って
優しさを知る

だから
みんなが愛しいの

苦しいと感じるのは
君が必死に生きようとしているからで
決して君以外の全てが敵ではないのよ

瞼を閉ざす君に
太陽と月の光がふるように
それは自然な事

悪魔も天使も存在しないこの世界で
私達は「私達」として
歩きましょう

手を繋いで
生きていきましょう

新しい物語は
二人で
ゆっくり紡いでゆけばいいのだから

ハルカ。

<http://p.booklog.jp/book/113596>

著者：立木吉花

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yoshika-44/profile>

絵ブログ：CLAUDIUS.

<http://souken.blog.jp/>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト